

相唱和した。享保十四年藩臣前田孝和の徳應により帷を下して弟子を教授したが、門人市を爲し、加藤惟寅・生駒直武・不破篤敬・不破

後終に仕へずして歿した。時に元文元年二月廿二日、年五十六。著す所瓊敷玉藻一卷・白雪

伊藤忠勝 初諱忠順。小字長太郎、後彦兵衛。父の名は主計勝直。利吉の孫。天和元年忠勝父の歿後その祿千石を襲いで前田綱紀に仕へ、馬廻組に入り、正徳

四年小松町奉行となり、九年金澤町奉行に遷り、十五年馬廻頭に進み、元文五年三月歿した、年六十三。

伊藤忠寛 金澤の俳人。名は正秀。寶船路町に住し、新聞社員となり、明治七八年の頃此君庵二代を立几し、三十八

年十一月十五日五十九歳を以て歿した。

伊藤忠勝 初諱忠順。小字長太郎、後彦兵衛。父の名は主計勝直。利吉の孫。天和元年忠勝父の歿後その祿千石を襲いで前田綱紀に仕へ、馬廻組に入り、正徳

四年小松町奉行となり、九年金澤町奉行に遷り、十五年馬廻頭に進み、元文五年三月歿した、年六十三。

伊藤忠寛 金澤の俳人。名は正秀。寶船路町に住し、新聞社員となり、明治七八年の頃此君庵二代を立几し、三十八

年十一月十五日五十九歳を以て歿した。

伊藤忠勝 初諱忠順。小字長太郎、後彦兵衛。父の名は主計勝直。利吉の孫。天和元年忠勝父の歿後その祿千石を襲いで前田綱紀に仕へ、馬廻組に入り、正徳

四年小松町奉行となり、九年金澤町奉行に遷り、十五年馬廻頭に進み、元文五年三月歿した、年六十三。

伊藤忠寛 金澤の俳人。名は正秀。寶船路町に住し、新聞社員となり、明治七八年の頃此君庵二代を立几し、三十八

年十一月十五日五十九歳を以て歿した。

伊藤忠勝 初諱忠順。小字長太郎、後彦兵衛。父の名は主計勝直。利吉の孫。天和元年忠勝父の歿後その祿千石を襲いで前田綱紀に仕へ、馬廻組に入り、正徳

四年小松町奉行となり、九年金澤町奉行に遷り、十五年馬廻頭に進み、元文五年三月歿した、年六十三。

小頭として百石を受け、九年三十人頭となり、元文元年百石を加へ、寛延二年歿。子孫世々藩に仕へた。

伊藤利吉 通稱彦兵衛。圖書。父は長門守盛景。その先は伊勢の人。元和六年前田利常に仕へて二千石を賜はり、九年歿。子孫世々藩に仕へた。

伊藤八左衛門 鳳至 郡馬場の舊家で、世々十村役を勤めた。文政の頃の入左衛門は俳名を友陽といひ、篤實慈悲の人で、十二年金五百疋を賞賜せられ、天保元年無役惣年寄列となり、五年九十六歳の時扶持高拾五石を受け、九年百歳に達して染物二疋・銀二枚・鳩杖を賜はり、十一年正月歿した。

伊藤正純 通稱金右衛門。内膳。重澄の嫡男。享保八年父の歿後祿二千八百石を襲ぎ、寺社奉行・公事場奉行に歴任し、寛保二年歿した。

伊藤政親 通稱孫三郎。源右衛門。祖内膳重正の子兵助正能の二子平九郎政辰は配分知五百石を受け、之を養子政親に傳へ、政親は御表小將を勤めてゐたが、正徳二年江戸に於いて同役松原兵助と男色の事により申分をなし、三年二月十五日知行を召放し一類御預となつた。

伊藤政誠 一向一揆の首領で、通稱を宗十郎と言つた。天正四年八月廿一日附下間刑部卿法眼宛の訴狀連名中に、その名が見える。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。

伊藤由貞 字は太享、萬年と號し、講書の堂を春秋館と稱した。京師の人。少にして松永昌三に學び、晩年加州に

來り、客寓すること六年にして、元祿十四年七月歿した。年六十一。由貞の加賀に在るや、能く清貧に堪へ、經學詩文を以て諸生を教養し、一世に重きを爲した。